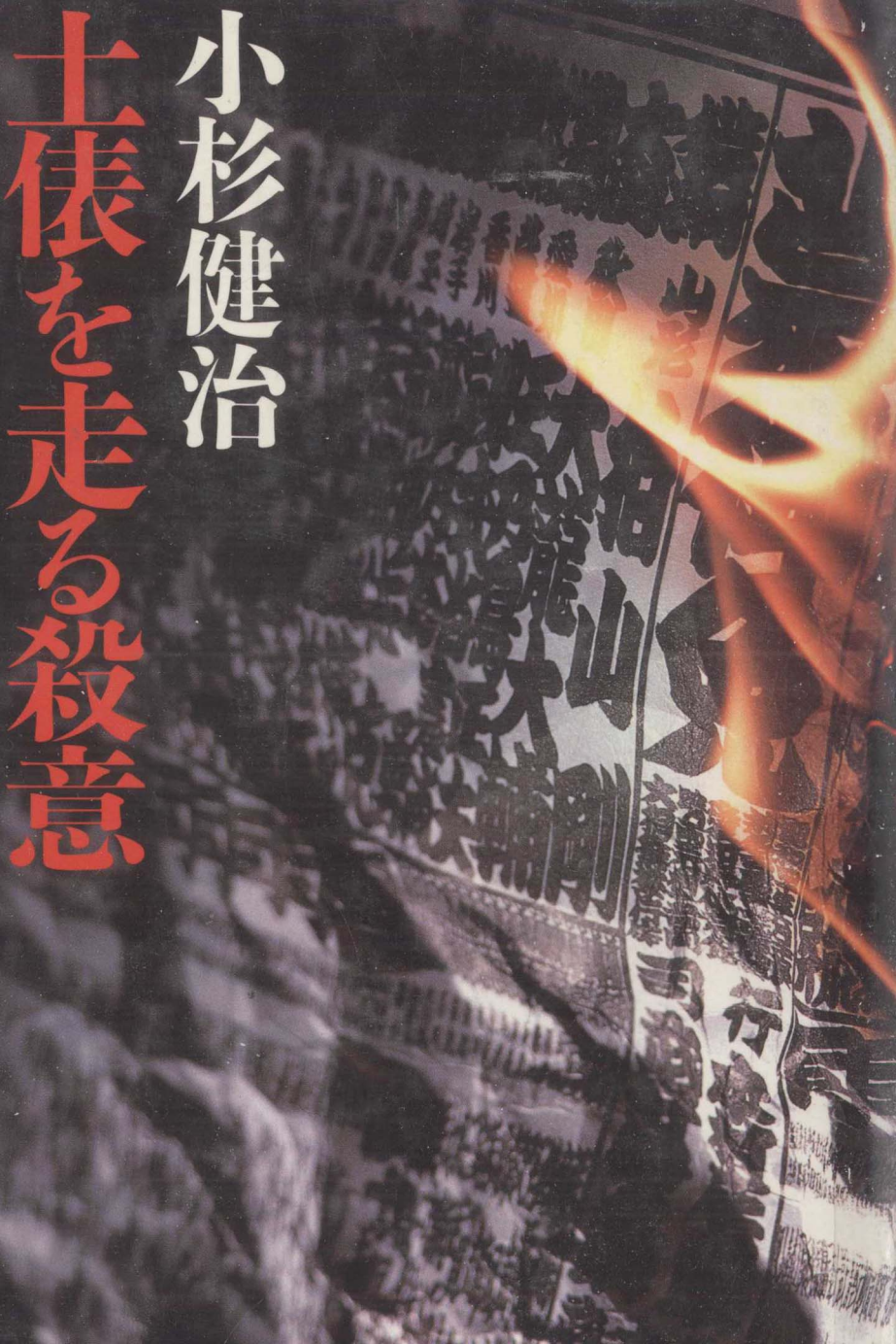
小杉健治

土俵を走る殺意



殺意

小杉健治

新潮社

H67969

●新潮ミステリー倶楽部特別書下ろし●土俵を走る殺意●著者・小杉健治・こすぎけんじ●発行・1989年5月25日●3刷・1990年5月20日●発行者・佐藤亮一●発行所・株式会社新潮社・郵便番号162東京都新宿区矢来町71／振替東京4－808／電話・業務部03（266）5111・編集部03（266）5411●印刷所・大日本印刷株式会社●製本所・加藤製本株式会社●価格はカバーに表示してあります。●乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kenji Kosugi 1989, Printed in Japan

ISBN4-10-602711-9 C0393

●目　〈土俵を走る殺意〉　次●

序　章　昭和四十二年夏場所　4
第一章　奉納相撲　35
第二章　初土俵　89
第三章　入幕　156
第四章　綱取りへ　208
第五章　再会　257
終　章　第二の人生　310

裝幀　平野甲賀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

土俵を走る殺意

序章　昭和四十二年夏場所

1

漆原洋一は助手席の窓から、五月の風にたなびいている赤や青の幟を見た。蔵前国技館の前には、早くも開場を待ちわびている人々の姿が見える。漆原は気をまぎらわすようにつぶやいた。

「もう明日は千秋楽か」

運転している妻の横顔を盗み見たがまっすぐに前を向いたままだ。後ろの座席では、小学校三年生の娘がダンボール箱にしがみついてまだ声をしゃくり上げている。

車は蔵前橋を渡った。川風が車の中に入りこんでくる。墨堤の新緑が初夏を思わすような強い陽差しを受けて色鮮やかだ。

橋を渡ると、同愛記念病院の手前を右折し、隅田川に沿って南下する。両国公会堂の前を過ぎると、総武線のガードが見えてきた。

「ほら、あれが回向院だ」

ガードをくぐったところで、漆原はフロントガラスに向かって指差した。妻は微かにうなずいたようだったが、声は出さなかった。

回向院の隣に、円形ドームの屋根が見える。昭和二十年三月十日の東京大空襲で被災し、終戦後

は進駐軍に接収されメモリアルホールと名を改めていた両国国技館である。以前に、ボクシングのタイトルマッチを取材に来たことがあった。

両国回向院は、江戸の大半を焼き尽くした、明暦三年正月の大火、いわゆる振袖火事で命を落とした無縁仏供養のために、幕府が建てた寺である。

が、回向院は江戸時代より、犬猫の供養が、お彼岸の入りに行われるようになった。

京葉道路を突っ切り、車は狭い参道に入る。門の手前で車から降りると、漆原はダンボール箱を抱えて、本堂に向かった。娘が漆原の背広の腕をつかんでついてくる。

本堂に入ってすぐ右手にある受付をのぞくと、中から係の男が顔を向けた。

「お願いいたします」

妻が男に声をかけた。ダンボール箱を見て察した男は、事務的に用紙を差し出して記入するように言った。妻は自分の名前と、そして、犬の名前を書く。娘はじっと虚ろな目を向けている。

係の男は部屋から出てきて犬の目方を計ると、慰霊堂のほうに運ぶように言った。漆原はダンボール箱を再び持って、男のあとに続く。外にこぢんまりとした建物がある。

薄暗い屋内に棚があって、ダンボール箱がいくつか置かれている。漆原は棚の空いている場所に、愛犬のなきがらを置いた。

「リョウにお別れを言いましょう」

妻が娘に言った。娘は肩をしゃくりあげながら泣きだした。

娘が生まれたときから家にいて家族同然だったリョウが、家族一人ひとりに別れのあいさつをして明け方に息を引き取ったのだ。

「さあ、行きましょう」

合掌した手を離してから、妻はぐずっている娘に言った。

「俺はこのまま社に出かける」
門に向かって歩きはじめてから、漆原は妻に言った。
「私は、デパートに寄って、あの娘に何かを買ってあげます。少し、なぐさめてやらないと」
妻は涙声で言うと、あわててハンカチを目に当てた。
門を出たところで妻が立ち止まった。
「あら、あの娘は」
漆原もつられて振り返ると、娘が慰霊堂の横に立ったまま、きょとんとした顔をしている。
「どうしたの」
妻が声をかけながら近寄って行った。
漆原は手をかざして顔を上げた。強い陽差しが顔に当たっている。空は青く澄み渡っていた。
「あなた、ちょっときて！」
妻の叫ぶような声に漆原が顔を向けると、妻が娘の目を手で遮っている。
「どうしたんだ」
妻が大きな石碑を見つめたまま、青ざめた顔で立ちすくんでいる。
この回向院は江戸勧進大相撲が定場所として行われた「相撲発祥の地」で、この石碑は力士塚である。
漆原がのぞき込むと、男が石碑の裏に隠れるようにして倒れていた。顔は鬱血しており、ひとめで死んでいることがわかった。漆原は、すぐに妻と娘を先に帰してから本堂に向かった。
本所署から捜査係の一行がすぐにかけつけ、やがて、警視庁捜査一課の捜査員や鑑識課員らがやってきた。捜査係長が、漆原の顔を見ると、

「第一発見者が腕ききのブン屋さんだなんて……」
と、ぼやくように言った。
漆原は東都タイムスの新聞記者になって十三年になる。地方支局の警察回りから、東京にもどってきて五年。現在は、警視庁詰めの記者だった。長い記者生活のなかで、自分が殺人事件の第一発見者になるのははじめてのことだった。
警察がやってくる間、漆原は被害者をじっくり観察した。身長は目測で百六十センチ前後。やせ型である。上質の背広にネクタイをしめているが、どことなく野暮ったい印象がある。漆原はその印象をすぐに手帳に控えた。
鑑識の調査が終わってから、係長は被害者の検分にかかった。
死体の検分を終えた係長は、漆原に質問した。漆原は死体発見時の模様を告げたが、娘のことはだまっていた。
「へえ、犬をねえ」
捜査係長は、漆原が回向院にやってきた理由を知ると感心したような、ばかにしたような顔つきをした。
「殺しですね？」
そんな係長の顔つきに反発を覚えて漆原はきいた。係長は顔をしかめたが、渋々答える。
「首の骨を折られて死んでいる。おそらく、背後から腕を首に巻いて力いっぱい締めたようだ」
「かなり腕の力が強い男の犯行ですね？」
漆原がきく。
「まるで、野見宿禰か当麻蹴速のような男かもしれんぞ、犯人は」
死体が力士塚の背後に隠れるように捨てられていたことから、係長は軽口を言ったのだろう。

相撲のルーツは、『日本書紀』に出てくる野見宿禰と当麻蹶速の力比べだという伝説がある。最後は、宿禰が蹶速の脇腹を蹴り、腰を踏み砕いて殺してしまった。

若い頃、大和路を歩いていて、宿禰蹶速角力の跡を見たことを思い出した。そういえば、この近くにも野見宿禰神社がある。

「で、死亡推定時刻は」

漆原が真顔になってきく。

「死後十時間といったところかな」

「すると、昨夜の十時から十二時ということになりますね。被害者の身元は？」

「背広の裏に横井と書いてあった。それから、秋田の職安の封筒を持っていた。それ以外は、まだわからん」

「秋田の職安？　出稼ぎでしょうか」

漆原がきくと、係長はくびを横に振った。

「顔色や手の形をみても農業をしている人間には思えないな」

漆原は被害者の体を思い出した。色白で手はごつくない。事務系の仕事をしてきた手である。

「じゃあ、セールスマンか何かでしょうか」

漆原は、被害者が商用で来たのかもしれないと、考えた。

「まあな。もういいだろう」

係長は急によそよそしくなり離れようとした。

「もう少し。物盗りですか」

「さっきの封筒の中に十二万円が入っていた」

「じゃあ、怨恨？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「まだ、わからんよ。じゃあ」
「待ってくださいよ。今までの情報じゃ、あとで警察発表するものと同じじゃないですか。第一発見者として協力しているんですから、もう少し、ネタをくださいな」
係長は舌打ちしてから、
「サイフの中に、前夜の宿泊場所と思われる旅館の領収書を持っていた。今言えるのはそれだけだ」

翌日の日曜日、漆原は本所署に顔を出し、他社の連中の隙を窺い、トイレに行くふりをしてそっと階段で三階まで上がった。奥の捜査本部に割り当てられた会議室の扉は閉ざされていた。捜査会議がまだ続いているようだ。
漆原は捜査会議が終わって出て来た係長をつかまえた。係長はうるさそうな顔をしたが、漆原は気にせずにきく。
「旅館の名前を教えてください。きょう教えてくれるという約束だったでしょう?」
「そんなこと言ったかな」
「冗談じゃないな。きょうなら警察の聞き込みも済んでいるから教えてやってもいいと言ったじゃないですか」
「西藤旅館だ」
「場所は?」
「それぐらい自分で調べろよ」
「そんな。じゃあ、その旅館のことはまだ発表はしないでしょうね」
「ああ、しない」

漆原は電話帳で同名の旅館を探し、一軒一軒訪ねて行った。電話では正直に答えてくれるはずがなかったからだ。
手応えがあったのは地下鉄銀座線稲荷町駅から歩いて十分ほど、合羽橋の道具屋街から一筋裏通りに入った場所にある『西藤旅館』だった。古い造りの旅館で、五十年配の恰幅のいい女将が、
「さんざん警察から聴かれたのよ。もう、やめて欲しいわ」
と、うんざりした顔で腕組みして言った。
「でも、ここから引き上げた日の夜に殺されているんですから」
ロビーで新聞を読んでいた浴衣姿の男が顔を上げた。女将はあわてて彼を帳場に案内した。帳場の小型カラーテレビで相撲中継が映っている。きょうは夏場所千秋楽だ。
「いったい何がききたいの」
女将が顔をしかめた。
「横井さんはいつからこちらに」
「二十五日から四泊の予定だったけど、二十六日の夕方になって、急に、知り合いのところに泊まるからと言って出ていったのよ」
そう言ってから、女将は煙草を細い指につまんだ。
「何時ごろでしょうか」
「四時過ぎかしら。ちょうど、中入り後だったから」
火を点けてから答えた。
「どうして急に？」
「横井さんに電話がかかってきたの」
「電話？　誰からかわかりませんか？」

「すぐ、部屋につないでしまいましたからね」
「男ですか、女ですか？」
「若い男の声だったわ」
「電話のあと、横井さんはすぐにここを引き払ったんですね？」
「ええ、何だかとてもうれしそうだったわ」
もちろん、警察はその人物を追っているのだろう。漆原がさらに質問を続けようとしたとき、
「ちょっと待って」
と言って、女将は手を伸ばしテレビの音量を大きくした。地鳴りのような歓声が耳をおおう。漆原も画面を見ると、土俵上に富士穂鷹と大龍が上がり、仕切りに入っていた。懸賞金の垂れ幕が何本も土俵上をまわっている。
画面は、大関富士穂鷹の仕切り姿に変わった。少し寂しそうな顔だちが女性ファンにはたまらない魅力のようだ。体つきも筋肉質で、均整がとれている。
「女将さんは、やはり富士穂鷹のファンですか？」
漆原はきいた。
「そうね。美男だものね」
女将は少し照れたように言う。富士穂鷹は日本橋浜町の料亭の息子で、生粋の江戸っ子である。
「わたしは、大龍ですね。下っ端のうちから目をつけていたんです。これはいい関取になるってね。一番出世を果たした直後、彼に会ったことがあるんですよ」
「あら、あんたも相撲が好きなの？」
「ええ、好きですねえ」
「男の方って、大龍のほうが好きのようね」

女将はテレビに目を移して言った。画面は今度は大龍の仕切り姿を映し出している。
大龍と富士穂鷹は互いにライバルである。ふたりは、すべての面で対照的だった。端整な歌舞伎役者のような顔だちの富士穂鷹に比べ、大龍は顔が四角くじつに無骨な感じである。よく言えば精悍な面構えといったところか。
富士穂鷹は歌がうまく、ピアノから三味線まで弾き、油絵も玄人はだしと聞く。それに比べ、大龍は不器用そのものであった。
今場所の成績は、富士穂鷹、大龍ともに十三勝一敗。ふたりの対戦成績は七勝六敗と富士穂鷹がややリードしている。
画面は、両者の仕切りの模様を映し出している。
「大龍が横綱になれば史上最年少ということになりますわねえ」
六年前の秋場所の後で、太鳳と柏山が横綱に同時昇進したが、このとき、太鳳二十一歳六カ月、柏山二十二歳であった。大龍は現在二十一歳になったばかりだから、もし優勝すれば文字どおり史上最年少ということになる。
テレビの歓声が一段と大きくなった。漆原も画面に目をこらす。制限時間いっぱいだ。
大龍のまいた塩と富士穂鷹のまいた塩が空中で混じりあって散った。アナウンサーの声が館内の歓声に圧倒されて聞きとりにくい。
腰をおろしてから両者にらみあっている。行司の声に、それまでの動きとは別に、両者は素早く構えた。
行司軍配が返って両者が立ち上がった。激しくぶつかり合い、すぐにがっぷり左四つになった。大龍は右足を前に左足をさげて、左前褌を強くつかんでいるが、右下手がとれない。富士穂鷹の右まわしをつかみにかかるが、そのたびに富士穂鷹が投げを打ち、まわしをとらせない。富士穂鷹は

大龍の左の肘を右手で抱えるような恰好になっている。
歓声で、アナウンサーの声はほとんど聞こえない。富士穂鷹が強引に寄り、大龍が踏ん張る。その隙に、富士穂鷹は上手まわしをつかみ、いっきにつりぎみに土俵際に押す。大龍も下手まわしに手がかかり、土俵際で持ち堪えた。再び、土俵中央に押し返す。
長い相撲になった。富士穂鷹の顔がアップで映る。額からの汗が目に入るのか目をしばたたかせている。大龍も富士穂鷹の肩に顎をかけて苦しそうな顔だった。その苦しみから早く逃れようとするかのように大龍が投げを打つ。そのたびに、富士穂鷹の体が動く。
検査役の一人の顔が大映しになった。手元の時計を見ている。水入りかと思わせた瞬間、それまで仕掛けずにじっと耐えていた富士穂鷹が勝負をかけたのか、相手の体を起こすようにつりぎみにいっきに寄りに出た。
ずるずると大龍が西花房下にさがる。大龍の足の指先が徳俵にかかった。富士穂鷹がなおもつりぎみに寄る。
「ほら、もう少しよ」
力が入ったのか、女将が悲鳴のような声を上げた。
大龍は徳俵伝いに東に移動する。大龍の左手が相手のまわしをつかんだ。再び、歓声があがる。大龍がまわりこみながら投げを打つ。富士穂鷹も投げを返す。漆原はあっと叫んだ。ふたりの体はそのまま土俵下に落ちた。行司軍配は、一呼吸遅れて東方大龍に上がった。
画面は土俵の全景に変わった。漆原の目から見るとほとんど同体のように思えたが、四方に座っている勝負検査役から声はかからず物言いはつかなかった。
富士穂鷹が西方にもどったが、髷を横に倒したまま、簡単に一礼をして土俵を降りた。大龍が戸惑ったような表情で勝ち名乗りを受け、矢をもらった。

「きょうの富士穂鷹、少しおかしかったわ。いつもとちがう」
女将がハンカチを丸めて興奮気味に言った。その声を聞いて、漆原も改めて分解写真を凝視した。漆原は、女将と見方がちがって、大龍のほうにいつもの迫力がないようだったと思った。何か迷っているような様子だった。
分解写真を見ながら、漆原はその理由がわかった。攻めの相撲をしていないのだ。大龍のよさは積極的な攻撃にある。それなのに、きょうは相撲が遅い。漆原から見ても、何度も攻め込むチャンスがあったように思える。
「どうして大龍は攻め込めなかったのでしょうか？」
アナウンサーが解説者に問いかける。
「おそらく硬くなったんでしょうね。もともと、大龍には気の弱いところがありますからね。それにしても、富士穂鷹の相撲にいつものピリッとしたところがなかったのは、大龍の硬さが移ったからでしょうか」
女将はテレビの音量を小さくした。
「ごめんなさい」
やっと質問をきいてくれるように女将が顔を向けたが、漆原は相撲の話題を続けた。
「女将さん、さっき富士穂鷹はおかしいと言ってましたが、どうしてですか？」
飢えた獣が餌を与えられたように、女将がすぐに口を開いた。
「富士穂鷹が強引に寄っていったでしょう。あの相撲は富士穂鷹らしくないわ。それに、土俵際で投げを食らったのも彼らしくない」
贔屓目（ひいきめ）な評かと、漆原は肩すかしをくらったような気がしたが、次の女将の一言に漆原は興味を持った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c